

幼児教育における

性差の問題

堀内 康人



幼児を保育したことの経験をお持ちにならない園長先生などは、各クラスの幼児の男女別の比率や配当に関して、その不釣合、とくに男の子が多いような場合を、実感として「さあこれはたいへんだ」とお感じになるようなことは少ないようです。ところが実際に毎日を保育でおいかけ廻されている先生や保育さんにとっては、まさにこうした問題は、身をけずるような問題となります。どんなやり方で園児が入って来るにしても、おもしろいもので大体男の子と女の子の比率は半々になるのですが、年によってはその半々が少しく均衡を失って、男の子が全体として、例えば三十名多かったり、年によってはその逆になったりします。そうした時に先生や保育さんは、できたら自分のクラスは男の子が少なくありますようにと心の中で願いたくなるものです。何故でしょうか、それは男の子の保育は手がかかるからです。ことをかえて言えば、先生や保育さんの労力消費率が高いからです。先生や保育さんの保育のやり方は年々

進歩もあり、ちがうわけですが、全体として昨年は保育に力が入り落ち着いた気持ですることができたが、今年はどうも、力を出しておるが落ち着いた気持ですることができない、などと感ずることがあるものです。こうした問題も実は幼児の男女別比率の問題に一部起因しています。

さてこのような幼児教育の現場における男女別比率、配当の問題、それにともなつて出てくる保育のしかた、あり方の問題もよく考えると、幼児の性差の問題と深い関係をもっています。そこでしばらくこの問題について考えてみましょう。身体的発達の性差の問題はここではふれないで、主として心理的行動的なものを見ていきたいと思います。先ず男の子と女の子を較べて一般的にいえる事は、男の子は動的で女の子は静的であるということでしょう。そこから必然的に男の子は活動的なものに興味を示し、女の子は静的なものに興味を示す結果があらわれてきます。しかしながらすべての子ども

がそうであるとは限りません。保育園や幼稚園に入る前の家庭、そしてそれを取り巻く環境の中で、例えば男兄弟ばかりの中で育ったような女の子は、女ばかりの中で育った男の子より活動的であったり、いわゆるおばあちゃん子は、どこことなく不活潑になるものですが、一般的にいえば前にいったようなことになりましょう。男の子は動的で女の子は静的であるということは先ず生物学的に、次に生理学的に、そして最後に教育学的に理解する必要があります。順序として先ず生物、生理学的に考えてみますと、男の子は女の子に較べて、もって生まれた「自由を求める反射」が強いということでしょう。では「自由を求める反射」とはいったいなんでしょうか。それは、なにか子どもの行動を束縛する要因が外部から働きかけた場合に、その束縛から自分を自由にする反射のことです。例えば子どもが進んでいこうとする路に、その進行をはばむような障害物があつた場合に、それとどき越えたり、取り除いたり、それから遠ざかったりする反射のことです。或る学者はいつております。この「自由を求める反射」は時には、人間の基本的な食を求める反射よりも強く働くことがあるし、時にはこれがさまたげられると、食物も食べないで死んでしまうような動物があると。まことにその通りで、おなかの空いた犬の首輪に鎖をつけて、知らない人がひっぱって行き、食物を食べさせようとしても食べませんし、雀などは目の前に餌がありながら、鳥籠という自由を束縛するものの中にいる限り、餌に

は見向きもしないで、自由を求めつづけ、結局死んでしまいます。

幼稚園や保育園で動きまわる、男の子の行動を静かに観察しますと、垣根を乗り越えた、シーソーがいつの間にか移動してしまった、先生一人の力ではとても運べないような大きな重い机が窓の所に運ばれた、時には箱積木でお家を作っているうちにそばにおいてあるピアノが邪魔になるというので、子どもが力を合せてこの重い怪物を動かしてしまつたなどというようなことさえあるものです。「邪魔物は消せ!!」ではありませんが、男の子はこうした「自由を求める反射」が女の子に較べて強いものですから自然と手や足の筋肉発達、そのコントロールのしかた、力を要する活動に対する筋肉の組織化が早くおこなわれます。そこで時々力余つて本人は撫でるつもりが女の子にとっては叩かれたということにもなるわけです。こうした男の子の特質を考えた場合、私共はジャングリズムやハントー棒も結構ですが、おとなの背丈よりも少々高い、太い金網の垣根などがどこにでもあります。ああしたもののが遊具として用いられてもいように思いますし、現に麻縄の網などでそうしたものができております。

次に、男の子は女の子に較べて「攻撃の反射」が強いということでしょう。それはどういった反射かといえば、名前が示す通りのものです。おとなでも子どもでも同じですが、なにか新らしい事をしようとする場合、何事によらず多少の危険率があるものです。そうだ

からといって引つ込み思案になっていつまでも消極的であつたならば、少なくとも新しい事はできません。そこで必要な事は決断ということになりますが、子ども達はそれを素朴な攻撃の反射でやっているのです。「えい、やっちまえ」というわけです。やつてしまつた結果をからだ全体で感じとり、次の「えい、やっちまえ」が少々形を変えて出てくるというわけです。こうした反射はいろいろな場面で見られます。ころがつて来るマリを取りに走る場面でも実験的に作つてごらんになれば、男の子の方が女の子の方よりどんなに攻撃的かがよくわかりますし、私共がよく見かける子どもの喧嘩を見れば一目瞭然です。女の子同志の場合はベチャクチャが多いものですが、男の子同志の場合はなかなか攻撃的でダイナミックです。

よく幼稚園や保育園で子どもたちが軍艦の絵を描きながら、絵の上でお互同志大砲のうち合いをやつたり、ジェット機を描いてウナリ声をあげている姿を見ておきますと、こうしたものが元来攻撃的性質をもっているものですが、それが幼い男の子の手にかかるとますますおさえを知らない攻撃性をもってきます。時にはドン・ドン・ウー・ウー、と男の子全体が湧き立ってしまうことがあります。そうした時の子ども達の姿を見てください。力を入れるところには極めて強調的にアクセントをつけ、生き生きとします。幼稚園や保育園の運動会で子どもたち、特に男の子の好きなのは、かけっこです。白い線の上に並んだ男の子と女の子の「用意！」という姿を眼に浮

かべてください。男の子の方が概して力がこもつて攻撃的です。こうした男の子に、時にはストーリープレイなどでお爺さん役などさせることがあります。たいへんぎこちないものになって、笑わされてしまうことがあります。第三に女の子は男の子に較べて「防禦の反射」が強いという点に特徴があります。これもまた名前の通りの反射です。しかしながら男の子にはこれが弱いかというところではありません。攻撃の反射が強ければ自然に防禦も強くなくてはならないのですが、男女を比較した場合には、どちらかといえば、女の子の方が防禦反射的行動が多いということになります。勢いよく飛び出しても、途中で逃げて来る、叩いてやるのではなく叩かれないように身構えするといった表現が当っております。こうした状態ですから行動的に攻勢に、ではなく、守勢にまわる面が多く出てきます。そこでおのずと言語的に守勢の体制をおぎなうといった形が出てきます。ですからおしゃべりが多くなるわけです。こうした事は幼児に限りません。おとなの場合も同じようなことがいえると思います。以上三つの基本的なことがらが男の子が動的であり女の子が静的であるということの生物学的、生理学的ちがいの基礎になっているように思います。この三つの基本的なことがらは、男の子と女の子の事物の認識のしかたにも多大にえいきょうしています。それはまた幼児を取り巻くおとな達が、幼児の頃から、どうしても男の子だからとか、女の子だからとかいう働きかけをすること

によって屈折していきます。さつと見てさつとやってのけてしま
う、さつときいて、さつと答える、時には独特の飛躍や、奇想天外な
どが飛び出します。そうした事は男の子の方に多いものです。そん
な調子ですから、男の子の保育には保育者のエネルギーが多に要
求されますが、考えようによっては男の子の保育の方が直接的で、
活気に満ちており、からっとして気持がよいものです。

最後に私共は、幼児教育における性差の問題を教育学的に考えね
ばなりません。その場合、生物・生理学的性差を基礎として、その
上に、「どんな男の子に」「どんな女の子に」保育したらよいのだろ
うかという、保育者自身もっている幼児教育観ひいては理想的人
間像が問題になります。しかもそれは十年二十年後の人間社会に対
する見透しにもつながってまいります。たいへんそっかしい保育
者は、自分を反省しながら、自分が保育している子ども達は、自分
とは反対に、落ち着いた子どもに教育したいと願うでしょうし、ど
うも物事を暗い方へ暗い方へと解釈し、決断のにぶい保育者は、自
分とは反対に明るく、てきぱきとした子どもに教育したいと願うで
しょう。しかしながら、それが単に保育者の願いで終ったのではない
たし方ありません。子どもたちは、この先生は表面はこう見えても
内面はちがうんだ、ということをつたいへん敏感に見てとってしまう
ものです。そこでできるだけ内面を一致させ、ちがうことばでいえ
ば人格的に高まらなくては幼児を立派に指導することはできないこ

とは御承知の通りであり、そこに幼児教育のむずかしさもあるとい
うものです。

私共は、今まで述べてまいりましたような男女の基本的性差の上
に、これからこの子どもたちが大きくなり、生きて行くだろう世の
中の事を考え合せて、どのように真に自由なもの、真に攻撃的なも
の、そして防禦的なものをつけ加えさらに男らしさ、女らしさとい
う価値を実現してゆくかを考えていかねばならないわけです。

いい意味においても悪い意味においても、最近男女差の問題がた
くさん形を変えて出てまいりました。そこで私共はどうしても幼児
時代におけるこの問題を、子どもたちのあらゆる活動場面で的確に
とらえ指導することが大切になります。男のような女、考えよ
うによつてはこれからの時代にはふさわしいかも知れませんが、そ
れがシャベルを持ったり、ハンマーをもったりする姿ではなく、機
械を操縦する中でそうした仕事をする姿でしたら、それでよいの
です。そうであるとしたら、ままごとばかりやっている女の子に、も
つと積木で構成あそびをさせるとか、木工をさせるとか、時には玩
具を分解させたり組立てさせるような経験も必要になります。う
ままだまだ幼児教育における性差の問題で、皆さん方と一しよに明ら
かにしていかなければならない問題がたくさんあります。

*

*

*

(東京家政大学)